

江戸時代末期人情本の活字化資料にみられる諸問題

—「あるのです」は「あるです」—

浅川 哲也

はじめに——江戸時代末期人情本について

人情本は、十返舎一九の『清談峯初花』(文政二年刊・一八一九年)を嚆矢とし、天保年間に為永春水の『春色梅見誉美』(天保三年〜四年刊・一八三二〜三三)を初めとする「梅曆」もので最盛期を迎える近世小説の一種である。人情本の地の文は文語体であるが、写実的な会話文を積み重ねる構成によって男女の恋愛模様の機微が微細に描かれており、会話文が中心に構成されていることよって、文政期以降の当時の江戸語の重要な資料のひとつとなつてゐる。寛政の改革以前に流行していた洒落本がその舞台を遊里・遊郭に限定していたのとは異なり、人情本は遊里だけでなく上層町人の市井での生活や家庭内での生活も描写の対象となつてゐる。また、人情本は一般の町家の女性の話しことばを活写しており、この点においても貴重な言語資料である。

文学史上の事実としては、天保の改革によって為永春水が手鎖五〇日の刑と版木破却の処分を受け(天保一三年・一八四二年)、天保一四年(一八四三年)に死没する。為永春水の「梅曆」ものが人情本としてあまりにも高名であるため、春水の断筆と死とともに江戸の人情本が途絶えてしまったかのような印象が一般にはあるが、水野忠邦の失脚(天保一四年・一八四三年)の後、江戸の人情本は松亭金水・二代目梅暮里谷峨・山々亭有人らによつて支えられ、江戸時代末期から明治まで人情本の刊行が続けら

れているのである。本稿でいう「江戸時代末期人情本」とは、概ね天保一三年から明治初年に至るまでの約三〇年間に版行された人情本のことである。

近世文学の研究分野においては、江戸時代末期人情本の評価は必ずしも高いものではないが、江戸時代末期人情本の代表的な作者である山々亭有人と仮名垣魯文・河竹黙阿弥・三遊亭円朝との交流の様相をみると、江戸時代末期人情本と明治開化期文学および日本近代文学との直接的な関連性については重視されるべきものと考えられる。

山々亭有人は、文学史においても、また国語史においても、江戸時代末期と明治時代とをひとつの連続したものと捉え直すうえで欠かすことのできない文人のひとりである。しかし、江戸時代末期人情本は、これまでに信頼性のある活字化文献がなく、正確なテキストを求めるには版本に拠らざるを得ないという状況が長らく続いてきた。この重要な言語史研究上の文献資料の空白部分を解消するために、筆者は江戸時代末期人情本の本文活字化のプロジェクトを進めている。

松亭金水作の人情本で活字化の対象としたのは、『毬唄三人娘』(初編〜三編、文久二年刊・一八六二年)・『鶯塚千代廼初聲』(初編〜二編、安政三年刊・一八五六年)である。山々亭有人作の人情本で活字化の対象としたのは、『春色恋廼染分解』(万延元年〜慶應元年刊・一八六〇〜一八六五年)、『毬唄三人娘』(四編〜五編、慶應元年刊・一八六五年)、『春色江戸紫』(元治元年〜明治元年刊・一八六四〜一八六八年)、『花曆封じ文』(初編慶應二年刊・一八六六年)、『春色玉嚶』(安政二〜四年頃成・一八五六〜五七年、明治元年刊・一八六八年)、『鶯塚千代廼初聲』(三編〜

四編、明治二年刊・一八六九年）である。傍線のある書名は、現在、筆者によって、次に挙げる一覧の底本に拠る本文全文の活字化作業が完了しているものである。

『春色恋廻染分解』（初編～五編）…東京大学総合図書館所蔵の版本（青洲文庫旧蔵）を底本とし、底本の落丁箇所を筑波大学図書館所蔵の版本で補った。

『毬唄三人娘』（初編～三編）…東京大学総合図書館所蔵の版本（青洲文庫旧蔵）を底本とし、底本の落丁箇所を早稲田大学図書館蔵版本で補った。『毬唄三人娘』（四編～五編）も同じ。

『春色江戸紫』…初編は新潟県柏崎市立図書館蔵本、二編～三編は青森県弘前市立図書館蔵本を底本とした。

『花暦封じ文』…東京都立中央図書館所蔵本（都中央誌料）を底本とした。

『春色玉襷』…国文学研究資料館所蔵本を底本とした。

本稿は、江戸時代末期人情本の本文活字化の過程で明らかになった従来の活字化資料にある種々の誤謬を明確にし、その上で明らかになった江戸時代末期の「です」使用の問題点について指摘することを目的とするものである。

一、江戸時代末期人情本の活字化資料

これまでに活字化された人情本の資料には、岩波書店日本古典文学大系・岩波文庫に収録された為永春水の『梅暦』ものや、小宮館日本古典文学全集に収録の為永春水作『春告鳥』、国書刊行会叢書江戸文庫の『人情本集』、小野正弘ほか（一九九八・一九

九九・二〇〇〇）などがある。これらの活字本は信頼性の高い活字化本文であるといえるが、いずれも文政期から天保期にかけての人情本を扱っている。

江戸時代末期人情本のまとめた活字化資料としては、人情本刊行会による「人情本刊行会叢書」（全二四冊、村上静人校訂、大正五年刊。以下「人情本刊行会版」）がある。活字化された人情本としてはほかに、「古今小説名著作集」（全一八巻、和装本、明治二四年刊、礪川出版社）、「絵本稗史小説」（全一五集、和装本、大正九年刊、博文館編輯局）、江戸軟派全集刊行会による「江戸軟派全集」（全二六冊、中川初伊編集、昭和二年刊）、「帝国文庫人情本傑作集」（山崎麓校訂、昭和三年刊、博文館）に収録された人情本をかぞえることができる。しかし、いずれの活字本も底本である版本の本文を正確に翻刻したものではなく、江戸時代末期人情本は重要な言語資料であるにも関わらず、信頼できる活字本に乏しい。

それにも関わらず、「人情本刊行会版」には江戸時代末期人情本資料が多く集中しているために、研究者によっては「人情本刊行会版」が江戸時代末期人情本の調査資料とされる機会が多いという深刻な問題がある。「人情本刊行会版」を主な調査資料とした研究に辻村（一九五九）・小島（一九七四）などがある。

辻村（一九五九）は、『春色恋廻染分解』『毬唄三人娘』『花暦封じ文』『春色玉襷』を「人情本刊行会版」によって調査している。また、小島（一九七四）は、『春色恋廻染分解』『春色江戸紫』『毬唄三人娘』『花暦封じ文』を「人情本刊行会版」によって調査している。

松村（一九九〇）は、「人情本刊行会版」を資料として扱うこ

とに批判的で、『春色玉櫛』を松村明氏架蔵本、『春色恋廻染分解』『毬唄三人娘』を東京大学総合図書館蔵本（青洲文庫旧蔵）、『春色江戸紫』『花暦封じ文』を東京大学文学部国語研究室蔵本で調査したとされている。しかし、後述するように動詞に直接接続する「です」の用例を見落とされている。長崎（二〇〇〇）は「人情本刊行会版」をもとに調査し、当該用例を版本で確認するという方法を採用されている。

また、「人情本刊行会版」をテキストとする例として、国立国語研究所がインターネット上で公開している全文検索システム『ひまわり』の「人情本」パッケージがある。ここでは、『仮名文章娘節用』・『花の志満台』・『花暦封じ文』・『春色江戸紫』・『春色恋廻染分解』・『恋の若竹』の本文を「人情本刊行会版」の本文に拠っている。

二、調査と問題点の分類

江戸時代末期人情本の作者である松亭金水の『毬唄三人娘』（初編～三編、文久二年～慶応元年・一八六二～一八六五年）および山々亭有人の『春色恋廻染分解』・『毬唄三人娘』（四編～五編）・『春色江戸紫』・『花暦封じ文』・『春色玉櫛』の版本の本文全文を活字化し、それを「人情本刊行会版」の本文と比較してみた。その結果、版本の本文と「人情本刊行会版」の本文との間の相違の性質を次の二点に整理した。

(a) 活字化された「人情本刊行会版」の本文は、版本の本文の表記を改変している。

(b) 活字化された「人情本刊行会版」の本文は、版本の本文そ

のものを改変している。

(a) の例としては、漢字→平仮名、平仮名→漢字、漢字→他の漢字、濁点の加除・改変などの例がある。(b) の例としては、長文にわたる削除、文・語句の削除・追加、文または語句そのものの改変、句読点の改変などの例がある。

「人情本刊行会版」では、大正時代にあった検閲制度が原因で、もとの版本にある男女の性愛描写に関する箇所が意図的に削除あるいは改変されており、テキストとしての完全性を欠いている。また、『春色恋廻染分解』は「人情本刊行会版」では第五編の序文が完全に削除されていたが、これは「人情本刊行会版」の底本における序文の脱落という問題があったようである。(a)・(b)のいずれも、版本にある原文の改竄という結果になる。

次節以下で用例文を示すにあたっては、略称を次のとおりとし、略称は原則として用例文の行頭に掲げた。

〔染版〕：『春色恋廻染分解』の版本、〔毬版〕：『毬唄三人娘』の版本、〔暦版〕：『花暦封じ文』の版本、〔紫版〕：『春色江戸紫』の版本、〔櫛版〕：『春色玉櫛』の版本。

〔染刊〕：『春色恋廻染分解』人情本刊行会版、〔毬刊〕：『毬唄三人娘』人情本刊行会版、〔暦刊〕：『花暦封じ文』人情本刊行会版、〔紫刊〕：『春色江戸紫』人情本刊行会版、〔櫛軟〕：『春色玉櫛』江戸軟派全集の活字本。

版本における用例文の位置は〔編数・丁数・表裏（オ・ウで示す）・行数（丸数字で示す）〕の順で示し、「人情本刊行会版」での用例文は（～）内に当該の頁数で示す。

三、(a) 版本の本文の表記の改変

三一、漢字↓平仮名

版本の本文にある漢字語彙の表記が改変され、「人情本刊行会版」の本文では元の漢字語彙が分からなくなってしまう。これら改変された漢字語彙の中には、「呷々・飄蕩・趣舎・剥啄・蹠蹠」など、唐話（白話）語彙ではないかと思われる語彙が多く含まれている。

(染版) そんな奴に限ツちやア荒淫しつじやうさますし(二・三〇才②)
↓(染刊) 其様な奴に限つちやア、しつツこうさますし。

二四四頁③

(毬版) 恟ぎよつと駭おどろきて。入り兼かねたりしが(初・二六ウ⑧) ↓(毬刊) 恟ぎよつと驚おどろきて、入りかねたりしが(三二頁③)

(毬版) 何なにやら呷くわ々くわ呷くわきて。(初・二六ウ①) ↓(毬刊) 何なにやらくどくどくどくど呷くわきて、(三〇頁⑩)

(毬版) 飄蕩うかくいたすうちに。(毬・初・二二ウ⑦) ↓(毬刊) ううかくかく致いたす中に、(二七頁⑩)

(毬版) 知らせま欲ほしと趣舎しよ。(毬・初・二九ウ①) ↓(毬刊) 知しらせまほしと、とつおついつ、(三四頁④)

(毬版) 雨戸あまどを剥啄はくおとなへば。(毬・初・三二ウ⑥) ↓(毬刊) 雨戸あまどをほとくおとなへば、(三七頁④)

(毬版) 蹠蹠むづかしいから(毬・初・四六オ⑧) ↓(毬刊) 蹠蹠むづかしい

から(五三頁⑤)

(曆版) うぬ等らが毎まい晩ばん千話せんわを代官所たいくわんしょへうつたへりやア(二・四

六ウ⑧) ↓(曆刊) 汝等うぬらが毎まい晩ばんいいちちやつきを、代官所たいくわんしょへ訴うたへりやア、(二〇六頁)

三一、平仮名↓漢字

版本の本文では平仮名表記であったものが、「人情本刊行会版」の本文では任意の漢字が当てられ、ルビ処理が施されているが、結果的に原文が損なわれている。また、当てられた漢字に付されたルビが版本の原文とは異なっているものも見受けられる。

(染版) 「べらぼうに前文まへがきが長ながイの(初・七オ⑥) ↓(染刊) 『筆棒」に前文まへがきが長ながいの。(二五一頁②)

(染版) 彦ひこ二には何なにくらからぬ身みなれども(初・三五オ④) ↓(染刊) 何なに暗くらからぬ身みなれども、(一八二頁⑤)

(曆版) ああくくででござりますね。(三・九ウ⑥) ↓(曆刊) 折あひにく悪く敷敷で御座ござりますね。(三三三頁⑧)

三一、漢字↓他の漢字

三一と同様に、版本にある漢字語彙の表記が平易な漢字表記に改変されてしまい、版本にある漢字語彙が資料として失われてしまっている。松亭金水作の『毬唄三人娘』(初編〜三編)は、読本に似た作風であり、地の文・会話文ともに豊富に漢字語彙を

使用している。

これらの漢字語彙には、「噫氣・爺親・兩個・沉吟・治郎・椽・沉呻・呵言・陪禮・遞与・了得・老爺・渾家・大爺」のように、現在ではルビに示された語の意味での使用が必ずしも一般的でない漢字語彙があり、これらの中には、唐話（白話）語彙ではないかと考えられるものも含まれているのであるが、「人情本刊行会版」では他の漢字語彙に改変されており、元の漢字語彙を知ることができない。

- (毬版) 噫氣 〈初・七ウ③〉 ↓ (毬刊) 噫 〈九頁⑥〉
- (毬版) 爺親 〈初・七ウ⑥〉 ↓ (毬刊) 父親 〈九頁⑪〉
- (毬版) 侍 兩個 〈初・九才⑤〉 ↓ (毬刊) 侍 二人 〈二二頁⑦〉
- (毬版) 沉吟 〈初・九ウ②〉 ↓ (毬刊) 思案 〈二二頁⑪〉
- (毬版) 懷竦め 〈初・一〇才⑤〉 ↓ (毬刊) 抱き竦め 〈二二頁⑦〉
- (毬版) 治郎 〈初・一〇ウ⑧〉 ↓ (毬刊) 野郎 〈二二頁⑤〉
- (毬版) 椽類 〈初・一八才①〉 ↓ (毬刊) 縁側 〈二〇頁⑪〉
- (毬版) 沉呻 〈初・一八ウ⑥〉 ↓ (毬刊) 思案 〈二二頁①〉
- (毬版) 呵言をいせまいと。 初・二六才⑧ ↓ (毬刊) 小言をいせまいと、 三〇頁⑨
- (毬版) 陪禮言葉に怒りを和らげ 〈初・二七ウ⑥〉 ↓ (毬刊) 陪禮言葉に怒りを和らげ、 三二頁③

- (毬版) 品を遞与して頓帰らん。 〈初・二九ウ⑦〉 ↓ (毬刊) 品を渡して疾く歸らん。 三四頁⑨
- (毬版) 了得卑賤ものゝ女兒。 〈初・三四ウ①〉 ↓ (毬刊) 流石卑しい者の娘、 三九頁⑥
- (毬版) 老爺さん 〈初・三五才②〉 ↓ (毬刊) 親父さん 〈四〇頁②〉
- (毬版) 景勢 〈初・三五ウ⑥〉 ↓ (毬刊) 有様 〈四二頁②〉
- (毬版) 三個 〈初・四二ウ⑤〉 ↓ (毬刊) 三人 〈四八頁⑪〉
- (毬版) 渾家は三十にまだ足らで。 〈初・四七才⑧〉 ↓ (毬刊) 妻は三十路に未だ足らで、 五四頁⑥
- (毬版) 朝は疾から晷の限り。 夜業針線は手足さへ。 〈初・四八ウ③〉 ↓ (毬刊) 朝はとうから日の限り夜業仕事は手足さへ、 五五頁⑨
- (毬版) 大袂に。 〈初・五二才④〉 ↓ (毬刊) 大風呂敷に、 五九頁⑨
- (毬版) 大爺も内義さんも。 〈初・五二ウ②〉 ↓ (毬刊) 旦那もお内儀さんも、 六〇頁③

三十四、仮名の改変

「人情本刊行会版」では、仮名（ルビの部分を含む）を改変することによって、版本にある語彙そのものが改竄されている。改

変された原文の例の中には、「うるたいる・あすぶ・ばやい・ま
い・いく」のような語彙がある。これらは「うるたえる・遊ぶ・
場合・前・良く」の音訛形であり、江戸語としての資料価値の高
いものなのであるが、「人情本刊行会版」では原形に改められて
いる。語連接上の音訛現象「わたしは↓わたしや」の例が版本に
あるが、「人情本刊行会版」では「わたしは」に改められている。
また、版本にある促音を伴う自称代名詞「わっちき」が、「人情
本刊行会版」では「わちき」に改められている。

(染版) うるたいて帰ッて直に出て来る途中で〈初・三九ウ⑦〉

↓ (染刊) 狼狽へて、歸つて直に出て来る途中で〈二八
八頁⑥〉

(染版) 何所ぞで遊ぼう〈二・一二オ⑥〉 ↓ (染刊) 何處ぞで遊
ぼう〈二二〇頁⑩〉

(染版) 彦 「夫りやそこの場合で 〈二・四四ウ⑧〉 ↓ (染刊) 夫
りやそこの場合で、 〈二六二頁⑥〉

りやそこの場合で、 〈二六二頁⑥〉

(染版) いそく重の井の前へ来ればそのまゝひき寄可愛のもの
やといだきあげ 〈三・二二ウ①〉 ↓ (染刊) いそく重の
井の前へ来たれば、其の儘引き寄せ、可愛の者やと抱き
上げ、〈染刊・三二七頁⑫〉

(暦版) 吾儕の病氣はイツ快なるが、しれやアしない 〈二・二四

ウ③〉 ↓ (暦刊) 私の病氣は、何時快くなるか知れやア
しない。』 〈二八〇頁〉

(染版) 私や駕は嫌サ 〈一・三六オ④〉 ↓ (染刊) 私は駕籠は
嫌さ。 〈染刊・二五二頁⑫〉

(染版) なんなら私の所にも 〈一・三一ウ④〉 ↓ (染刊) 何な
ら私の所にも 〈二四五頁②〉

版本には、「叫べど」の音訛形かと考えられる「さげめど」の
例や、「あいかり(鮎狩)・「もんじゅじよ(問注所)」のように
音韻上で特徴のある語彙があるが、「人情本刊行会版」では語彙
として一般的な語形に改められてしまっている。

(暦版) 呼とさげめど松風の外は音なき眞野中故、〈初・一八オ

②〉 ↓ (暦刊) 呼べど叫べど松風の、外は音なき眞野中
故、 〈二七二頁・⑫〉

(染版) 玉川へ鮎狩にとて連だちし 〈二・三五オ⑦〉 ↓ (染刊)

玉川へ、鮎狩にとて連だちし、 〈三三〇頁⑥〉

(染版) 和田様の文注所江うったえませうか 〈三・一八オ⑦〉 ↓

⑨ (染刊) 和田様の問注所へ訴へませうか。 〈二九九頁

版本には、形容動詞「まっか(真ッ赤)」の古形または変種と考えられる「まいっかい」があり、貴重な語彙資料となっているが、「人情本刊行会版」では当該例が「まっか」と改められている。また、形容詞「四角しい」・形容動詞「馬鹿ら」などが版本から拾えるが、いずれも「人情本刊行会版」では「しかしい・馬鹿な」に改められている。特に、「人情本刊行会版」で改められた「しかしい」では語義不明である。

(染版) 似てもつかぬ真ッ赤ナ偽物 〇三・五才④ ↓ (染刊)

似ても似附かぬ真赤な偽物、(染刊・二八二頁⑩)

(染版) 茶入かいかにもお鹿末だしかくしい時代ダ 〇三・一二ウ

② ↓ (染刊) 茶入が如何にもお粗末だ。しかしい時代だ。〇二九一頁⑦

(染版) しかし其金を此方ばかりで出すといふのも馬鹿ナ咄した

だテ(四・四四ウ①) ↓ (染刊) 併し其の金を、此方計りで出すといふのも馬鹿な咄だて。〇二九六頁④

三一五、濁点の加除・改変

「人情本刊行会版」では、濁点の加除処理などによって、版本の語彙が改竄されている。版本にある「手にでに」の語彙は、「てんでん」の語源についての有力な資料と考えられるが、「人情本刊行会版」では「手に手に」と改変されていて、版本の資料的な価値が損なわれている。また、副詞「ふらふら」が「人情本刊行会版」では濁点が付されて「ぶらぶら」に改変されているが、江

戸語における「ふらふら」の意味を検討する上でこの濁点の処理には疑問がある。

(染版) 提灯手に^て携^{たづ}へ 〇初・五五才③ ↓ (染刊) 提灯、

手に手に携へ、〇二〇四頁⑦

(染版) ふら^あら^あく歩行きや往まさアネ 〇二・三九才⑦ ↓ (染刊)

ぶら^あら^あく歩行きや、〇二五五頁④

今回の活字化の対象とした版本には、「てがかり^てかがり」と「ひかげ^ひひかげ」のように、濁音のある音節が語中で移動するという例がある。「ひかげ」の例は、「ひ」+「かげ」が複合名詞となるときに連濁を生じ、「かげ」の一拍目の清音が濁音化したために二拍目の濁音が清音に転じたという例であろうか。これらは版本の誤刻である可能性もあるが、用例としては顕著に見られるので、別途検討する必要がある。しかし、「人情本刊行会版」ではこのような例はすべて一般的な濁音の位置に改められている。

(染版) 手懸りは 〇二・二四ウ⑦ ↓ (染刊) 手懸りは、〇三三

六頁⑩

(暦版) 日陰の身でも居まい、〇二・三六才⑥ ↓ (暦刊) 日陰の

身でも居まい。〇二九五頁①

四、(b) 版本の本文そのものの改変

「人情本刊行会版」では、男女の性愛を描写する場面で意図的な本文削除や本文の改変を行っており、複数箇所では長文にわたるものがある。次に挙げる例の中で、一重傍線部は版本の本文にあつて「人情本刊行会版」の本文から削除されているもの、二重傍線部は版本の本文を意図的に改変している箇所である。

四一、花雪と小方の逢瀬の場面の本文削除と改変

『春色恋廻染分解』の主人公花雪の台詞を、芸妓小方が引用した「成程はじめたらう」は、現代東京語では「ほんとうに(男性経験が)初めてのようだ」というほどの意であり、この場合の江戸語の助動詞「たらう」は、現代東京語の比況の助動詞「ようだ」の意味を含む広い用法であると考えられる重要な用例である。しかし、「人情本刊行会版」では、助動詞「たらう」は削除された箇所であり、版本を見なければこの例を知ることができない。また、この文が削除されてしまうと、この後で花雪にからかわれた悔しさで小方が涙を流すという心情が理解できなくなる。

版本の「やう／＼のことで思ひが晴たものだからツイ心安だてにぞんざいな口を利ていけません」という小方の台詞は、「人情本刊行会版」では、「かうして優しい言葉をかけられたものだからツイ心安だてに、俺末な口を利ていけません。」と場面そのものが改変されている。小方が花雪との初めての逢瀬を果たし得たという趣旨が曖昧になつてしまったため、小方の心情が分か

りにくいものになつている。

(染版) 花 「お前ふるへてるノ 小 「なんだかぞく／＼寒氣かして來ましたハ 花 「夫ならこつちもゞやうと花雪は土手側の障子をゞる小万はとももの戸を建きり 小 「モシ舟が片よりやしませんかねへト言も小声でしかとは聞へず夫より双方しはらく無言船頭大声でおもかちヨヲ引／＼第二回／＼暫くありて障子を明たかひに川にて手をあらひかたへの障子もあけんとせしかば

花 「そつちはゞて置ねへな 小 「夫でもあつう／＼ございますものを
 花 「お前今寒いと言ッたぢやアねへか 小 「私にばかり暑か
 らせておまへはト言かけしがフト心づきおまはんは平氣である
 んだものを 花 「おつう言直したな 小 「やう／＼のことで思ひ
 が晴たものだからツイ心安だてにぞんざいな口を利ていけません
 花 「夫がいゝのよ織目高ぢやアおもしろみが薄い夫とも外に
 うぬの我のといふ人でも有わけか 小 「又そんなことをお言は
 るよ先き成程はじめたらうとお言なすッたぢやア有ませんか
 ト泪ぐんで居る(初・九才／＼九ウ)

(染刊) 花雪『お前震へてるの。』小萬『なんだか、ぞく／＼寒氣

がして來ましたわ。』花雪『其様なら此方も鎖めよう。』と、花雪は土手側の障子を鎖める。小萬は艦の戸をたてきり、小萬『モシ、舟が片よりやしませんかねえ。』船頭大聲で、船頭『面舵よ才引。』／第二回／暫くありて障子を開ける。小萬はかたへの障子も開けんとせしかば、花雪『其方は鎖めて置きかねえな。』小萬『夫でも。』花雪『お前今寒いと言つたぢやアねえか。』小萬『お前は。』と、言ひ懸けしが、フト心付き、小萬『お前はんは平氣であるんだものを。』花雪『おつう言直したな。』小萬『かうして優しい言葉をかけられたものだから、ツイ心安だてに、僂末な口を利用していきません。』花雪『夫れが宜いのよ。折目高ぢやア面白味が薄い。それとも外に汝の我のといふ人でもある譯か。』小萬『又其様なことをお言ひなはるよ。』と、泪ぐんで居る。〈一五三〜一五四頁〉

四一二、八蔵とお柳の情交の場面の本文削除

番頭の八蔵と後家のお柳の情交場面で、版本の本文が長文にわたって削除されている。そのため、版本の原文では「其身をピツたり寄添」たのは女性のお柳だったのであるが、「人情本刊行会版」ではそれが男性の八蔵の行為にすり替わってしまっている。

(染版) 八「是がかんじん要の咄しと耳に口寄さゝやけば 柳
「そんなら彼茶入をば 八「モシお聲が高いめつたな事をと言
ツ、お柳を引寄すれば 柳「なんぼ何でもこの昼中 八「それ御
覧なさいやつぱりお前さんは嫌なのだ 柳「よく色／＼な無理ば
かりと其身をピツたり寄添てすでに無道の門内へ入らんとせし
時次の間よりがんぜなければ三吉が片言まじりに 二「お重ちや
ん味おくれよと出來れば二人はあはて飛退て〈初・二四ウ〜二五
才〉

(染刊) 八蔵「是れが肝賢要の咄。』と、耳に口寄せ私語けば、
お柳「そんなら彼の茶入をば。』八蔵「もしお聲が高い、滅多な事
を。』と、其の身をびつたり寄添へし時、次の間より、頑是なけ
れば三吉が、片言交りに、三吉「お重ちゃん。味おくれよ。』と、
出で來れば、二人は周章て飛び退いて、〈一六九頁〉

四一三、雁八とお重の会話の場面の本文削除

川に身投げをしたお重を救った翻所の雁八が、お重に情交を迫る場面で、版本の本文が削除されている。

(染版) 土左衛門に成たと思やア何にもこれがおめへの横腹へ

鎗やりでも突つ込こムといふのぢやなしおめへも相かな應なりに能い思おもひをして人ひとにも喜よろこばせサ其その替かはりにや大だい切じにして三さん度どの飯めしは己おれが焚たき仕事しごとに出でた帰かへりにや好すきなものを買かッて來くるし二一・一オ一ウ

(染刊) 土左衛門どざゑもんに成なつたと思おもやア。何なにも之これがお前めえの横よこ腹はらへ、鎗やりでも突つ込こむといふのぢやなし。其その代かりにや大だい切じにして、三さん度どの飯めしは俺おれが炊たき、仕し事ごとに出でた歸かへりにや、好すきな物ものを買かッて來くるし、
 へ二〇八頁

四一四、彦三と芸妓小金の情交の場面

版本の地の文に長文の削除箇所がある。

(染版) 彦 「おめへだん／＼ふとるの 金 「そんなにひどくしちやア痛いたいやネトかくたはひもなき業わざくれもすいた同どう士の其その中なかには千せん万まん無む量りやうの樂たのみならん見みる／＼ひとつの夜や具ぐ非ひ番ばんとなりて雨あめとなり又また雲くもとなり程ほどなく鷄けい鳴めいつげわたれど旅たび寐ねの氣き樂らくは衣きぬ／＼のうれひもなく天あ窓まの上うへへ旭ひのさすに驚おどろき起おいづるに至いたりて二一・四七ウ四八オ

(染刊) 彦三『お前段々肥めえだん／＼ふとるの。』小金『其その様ようなにひどくしちやア痛いたいやね。』と、かくたはひもなき業わざくれも、好すいた同どう士の其その中なかには、千せん万まん無む量りやうの樂たのみならん。程ほどなく鷄けい鳴めい告つげ渡わたれど、旅たび寢ねの氣き樂らくは後きぬ朝あの憂うれひもなく、天あ窓まの上うへへ旭ひのさすに驚おどろき、起おき出い

づるに至いたりて、二六七二六八頁

四一五、重の井と番場忠六の会話の場面

版本では、二重傍線部「帯紐解ねへナ」の「ねへ」は、軽い尊敬を表わす「なる」の命令形であり、前夫の花雪にはもう未練はないと言う重の井の言質を取った忠八の「帯紐を解け」という命令表現であるが、「人情本刊行会版」では「そんなら肌身はだみは汚けがさねえな（それなら肌身を汚すことはしないのだな）」と、打消の助動詞「ない」の意に解されてしまい、前後でまったく意味が通じていない。

(染版) 重 「ナ二人ふたりばからしいあきられた人ひとになんで未練みれんが残のこンせう 忠 「そんなら帯紐解ねへナ 重 「アレサぬしも聞きわけのない夫それゆへ先さツきからいろ／＼分わけ解わけを申まスニ三三・一一ウ

(染刊) 重の井『ナ二人、馬鹿らしい。飽あきられた人ひとに、なんで未練みれんが残のこりんせう。』忠六『そんなら肌身はだみは汚けがさねえな。』重の井『アレサ、主ぬしも聞き譯わけのない。夫それゆへ先さ刻さつきから種いろ／＼分わけ解わけを申ますに。』二九〇頁

四一六、版本にない本文の追加——「あるのです」は「あるです」

助動詞「です」は、江戸時代の中頃までは活用形が終止連体形一形で、活用語に直接接続することができ、使用する階層も医者・男伊達などに限定的なものであったが、山々亭有人作の江戸時代末期人情本に至って、活用形に未然形・連用形が出そろい、活用語に接続する場合は準体助詞「の」を介し、使用階層が一般の男女にまで拡大したとされている。

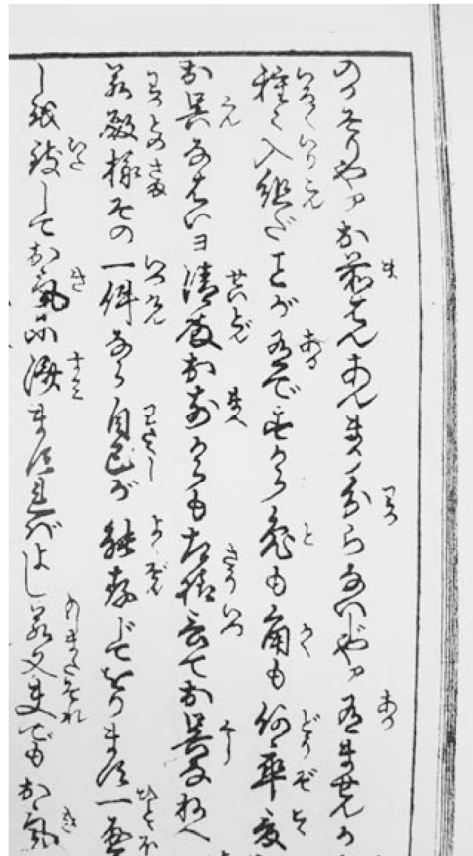
従って、有人の人情本に現れる「です」使用は、現代東京語における「です」使用とほとんど相違のないものといえるが、江戸時代中期までの活用語に直接接続する「です」の使用は皆無ではなく、『春色江戸紫』に準体助詞「の」を介さずに形容詞（形容詞型の活用をする助動詞を含む、以下同）に直接接続する「です」の例が一例あることが松村（一九九〇）で指摘されている。

〔紫版〕「左様は體からだが。續つかないですか」〈芸妓小照↓惣次郎、初・一〇ウ⑤〉

江戸末期の山々亭有人作の人情本では、「です」は形容動詞の丁寧体を含め、直接接続するのは体言相当語に限られており、動詞・形容詞など活用語に直接「です・でし」が接続するのは、極めて稀な例である。しかし、今回の活字化作業の中で、「です」が動詞に直接接続する例が『花暦封じ文』（四編・二七ウ）に一例あることがわかった。松村（一九九〇）は、江戸時代末期における活用語承接の「です」の用例を問題点としているのであるが、『花暦封じ文』にあるこの重大な用例を見落としているようである。

る。
従来の活字化資料では、当該箇所準体助詞「の」を加えるという処理をしていた。当該例の版本影印【図1】と、「人情本刊行会版」本文、その他の活字本での当該箇所の例を併せて次に示す。

【図1】



(曆版) 夫には種々入組だことが有ですから兎も角も何卒爰を

明てお呉なはいヨ 《芸妓七吉↓橋三郎、四・二七ウ②》

(曆刊) 夫れには種々入り込んだ事があるのですから、兎も角も何卒、爰を開けてお呉なはいよ。《四一〇頁》

七「：夫には種々入組だ事が有ですから兎も角も何卒爰を明けて

お呉なはいヨ 《古今名著集・八・七九頁》

七「：夫には種々入組だ事もあるのですから、兎も角も何卒爰明けて、お呉なはいよ、《絵本稗史小説・一一・四三二頁》

今回の調査結果による山々亭有人作の人情本五作品中にある

	小計	その他	ません	副助詞	形容詞・形容詞型活用 の助詞「ない」	動詞	副詞	そう	よう	助詞「ん」	助詞「の」	形容動詞語幹	代名詞	名詞		
	127			1			13	10	9	22	8	11	7	46	です(終止形)	『春色恋染分解』
	2							1					1	1	です(連体形)	初編～五編
合計	6							1				1		4	でし(連用形)	1860～1865
142	7					1	2							4	でしょう	
	23						5		1	4	2	2		9	です(終止形)	『嵯峨三人娘』
	1													1	です(連体形)	四編～五編
合計	2		1											1	でし(連用形)	1865
27	1													1	でしょう	
	33	1			1				3	4	2	4	1	17	です(終止形)	『春色江戸紫』
	0														です(連体形)	初編～三編
合計	0														でし(連用形)	1864～1868
34	1													1	でしょう	
	62	2				1	3	5	6	15	6	7	6	11	です(終止形)	『花暦封じ文』
	1													1	です(連体形)	初編～四編
合計	7		2			1	1							3	でし(連用形)	1866
73	3									2				1	でしょう	
	37						2	2	4	3	3	2	1	20	です(終止形)	『春色玉襪』
	2										1			1	です(連体形)	初編～三編
合計	4										1	1		2	でし(連用形)	1856～1857
44	1													1	でしょう	

【表1 山々亭有人の人情本にある「です」の上接語】

「です」の全用例の上接語を整理し、【表1】に示した。

【表1】にみるように、有人作の人情本では、動詞承接の「です」が一例、形容詞承接の「です」が一例あるということになる。有人作の人情本にわずかながらみられる活用語承接の「です」の用例は、江戸時代中期までの、活用語に直接接続できる指定辞使用の残存と見るべきものであろう。

なお、松亭金水作の『毬唄三人娘』（初編～三編）においては、「です」の使用例がみられない。「です」使用に関して有人と金水との文体差は明らかである。

おわりに

「人情本刊行会版」では、版本の表記が他の表記に改変されており、その改変された表記の中には、貴重な語彙資料や、唐話（白話）語彙と見られる漢字語彙が豊富にあるという事実があるが、「人情本刊行会版」の本文ではそれがわからなくなっている。「人情本刊行会版」は版本にある性愛場面などの本文を意図的に削除・改変しており、テキストとしての完全性を欠いている。「人情本刊行会版」は丁寧の助動詞「です」が動詞に接続する場合に、版本にない準体助詞「の」を補って版本の本文を「あるのです」と重大な改変をしている例がある。特に、江戸時代末期の人情本に「あるです」の語形があったということは、人情本の版本の全文を正確に翻刻して初めて初めて判明した事実であった。

従って、「人情本刊行会版」は、語学研究・文学研究ともに、専門的な研究のための資料としてはまったく使用に耐えない文献であるということが出来る。

言語史研究においては、活字化された資料を扱う際にそのテキストの信頼性についてあらかじめ考慮すべきであり、また、版本などの原本を直接に調査するという姿勢が重視されてしかるべきである。

【参考文献】

- 浅川哲也（一九九八）「動詞・助動詞承接の「です」について——明治大正期を中心に——」『国語研究』第六一号
- 浅川哲也（一九九九）「形容詞承接の「です」について——形容詞述語文丁寧体の変遷——」『國學院雑誌』一〇〇—五
- 浅川哲也（二〇〇九）『春色恋洒染分解』初編～三編（翻刻）『人文学報』第三八四号
- 浅川哲也（二〇一〇）『春色恋洒染分解』四編～五編（翻刻）『人文学報』第四二八号
- 浅川哲也（二〇一一）『毬唄三人娘』初編～三編（翻刻）『人文学報』第四四三号
- 浅川哲也（二〇一二a）『毬唄三人娘』四編～五編（翻刻）『人文学報』第四七二号
- 浅川哲也（二〇一二b）『春色恋洒染分解 翻刻と総索引』おうふう
- 浅川哲也（二〇一三）『春色江戸紫』初編～三編（翻刻）『人文学報』第四七三号
- 浅川哲也（二〇一四）『花暦封じ文』初編～四編（翻刻）『人文学報』第四八八号
- 小野正弘ほか（一九九八・一九九九・二〇〇〇）「翻刻」『仮名文章娘節用』前編・後編・第三編『鶴見日本文学』二・三・四
- 小島俊夫（一九五九）「後期江戸語における「です」・「デアリマス」・

「マセンデシタ」『国語学』三九 〔後期江戸ことばの敬語体系〕
収録 昭和四九年九月

小松寿雄（二〇〇七）「人情本」『日本語学研究事典』明治書院

辻村敏樹（一九五九）「近世後期の待遇表現」『国語と国文学』三六一

一〇 〔敬語の史的研究〕収録、昭和四三年

土谷桃子（二〇〇九）『江戸と明治を生きた戯作者 山々亭有人・条

野採菊散人』平成二二年五月、近代文芸社

長崎靖子（二〇〇〇）「江戸後期口語資料に見る『です』の意味―そ

の使い手と語感を通して―」『日本女子大学院文学研究科紀

要』第六号 〔断定表現の通時的研究〕に収録、平成二四年九月、

武蔵野書院

松村 明（一九九〇）「明治初年の洋学本語書における助動詞『です』

とその用法」『近代語研究 第八集』平成二二年九月、武蔵野書院

『近代日本語論考』に収録、平成二一年

村上静人（二九一七）『人情本略史』（人情本刊行会）

【注】

一 小松（二〇〇七）に拠る。

二 江戸時代末期人情本の版本の本文はほぼ総ルビに近いのであるが、活字化された「江戸軟派全集」などは、本文の一部にしかルビを付していない。「人情本刊行会版」は本文の総ルビに努めてはいるが、本稿で種々示すように版本の本文の正確な活字化になっていない。

三 長崎（二〇〇〇）に拠ると、『春色恋廻染分解』『春色江戸紫』『毬

唄三人娘』『花暦封し文』『春色玉櫛』の調査には、人情本刊行会（一九一六）を使用した。採取した用例に関しては、『春色恋廻染分解』

『毬唄三人娘』は東京大学総合図書館蔵本（青洲文庫旧蔵）、『春色江戸紫』『花暦封し文』は東京大学文学部国語研究室蔵本で確認した。『春色玉櫛』は版本が見つからず、確認できなかった。用例部分には版本と翻刻の相違が見られるものもあったが、内容に関わらない部分なので、人情本刊行会の翻刻に従った。尚、五つの人情本の「です」の全用例数は本調査では三二七で、松村（一九九〇）の三一六と数値が異なっている。（二四三頁）とある。この数値は本調査の結果とも異なる。

四 作成者・公開者は岡部嘉幸氏（千葉大学文学部）である。なお、岡部氏は「人情本刊行会版」の本文が版本と著しく異なることを従前から承知しておられることを明記しておく。

五 松村（一九九〇）に拠る。

六 浅川（一九九八・一九九九）を参照。

【付記】

本稿は、日本語学会・二〇一三年度秋季大会（静岡大学）において口頭発表した内容に加筆したものである。口頭発表の席上で御指導・御助言をくださった方々に御礼を申し上げる。

なお、本稿は科学研究費・基盤研究（C）「人情本を資料とした現代東京語成立に関する基礎的研究」（研究課題番号：23520558）に基づく研究成果の一部である。

（あさかわ てつや・首都大学東京 准教授）